

ペスタロッチー研究の新たなる地平

—ペスタロッチー生誕250年祭から—

広島大学 鈴木 由美子

1996年は、ペスタロッチー生誕 250 年にあたる。今から 250 年前、1746 年 1 月 12 日にペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) は生まれ、81 年の生涯を通して教育改革にその身を捧げ、人類の幸福に偉大な功績を残した。これまで、生誕 150 年祭 (1896 年)、没後 100 年祭 (1927 年) ならびに生誕 200 年祭 (1946 年) がとりおこなわれ、ペスタロッチー研究誌の発行、批判版全集の発行など、ペスタロッチー理解のための様々な事業が遂行されてきた。

今年度とりおこなわれるペスタロッチー生誕 250 年祭のメルクマールは、「ペスタロッチーは神話 *Mythos* か、それとも現実 *Realität* か」にある。ポスト・モダンの流れのなかで、わたしたちは「近代」という時代性において「自明の理」としてきた多くの原理の再解釈を余儀なくされている。「進歩的 *progressiv*」に対する「反進歩的 *anti-progressiv*」、個人の解放が示す「自由 *Freiheit*」と「孤立 *Solitude*」。近代市民社会を形成する上で、有力な指導原理となった多くの理念が、今やわたしたちの社会を抑圧する原理となってきているのである。

ここでの問題は、近代を超える指導原理をどこに見いだすかにある。近代市民革命を経た社会に生きるわたしたちは、その指導原理を「宗教」に求めることはできない。また、「契約社会」がもたらすはずであった平等な社会も、空虚な夢に終わろうとしている。では今わたしたちは、その指導原理をどこに見いだせばよいのだろうか。一連の「近代」批判も、「近代的理念」の再解釈も、実はこの問題をめぐるものなのである。したがって、単に「近代」といわれたものを批判するだけでは、この問いに応えることはできない。「近代」を批判

しながら、次に来るものを指し示す哲学的理念の構築が求められているのである。

ペスタロッチーに関する問題も、この点にあるといえる。ペスタロッチー再解釈の流れは、ただ単にペスタロッチーの読み直しを求めるものではなく、ペスタロッチーの再解釈を通して、次世代に何を残していけるのか、残していかなければならないのかを問う、極めて現代のかつ哲学的な課題を提示するものなのである。

ここでは、今年度に予定されているペスタロッチー記念祭の様々な試みを紹介するとともに、そこから見えてくるペスタロッチー研究の今後の動向について述べていきたいと思う。

1. ペスタロッチー生誕 250 年祭の基本理念

ペスタロッチー生誕 250 年祭は、ふたつの課題をもっている。それは第 1 に、ペスタロッチーを今日的な意味で新たに解釈することであり、第 2 に、新しいペスタロッチー像を広く深く一般に知らしめていくことである。このことは先に述べた、「神話か現実か」という問題意識と関連する。

ペスタロッチー生誕 250 年祭を主催したチューリヒ市ならびにペスタロッチーアーヌムは、この記念祭の目的をペスタロッチーの業績と活動に光をあてることにおいている。このことは、ペスタロッチーを崇拜すべき対象として国民に神聖視させることではない。たしかに、ペスタロッチーは、偶像化されてきたし、現在においてもそうである。では、偶像化されたペスタロッチー像は、彼の業績と活動を正しく伝えているかといえ、必ずしもそうとはいえない。偶像化されることによって、ペスタロッチーは正しく理解されたのではなく、むしろ誤解され、彼の思想を歴史に照らして正当に理解することが妨げられてきたといえよう。偶像化されたペスタロッチー像には、くまなく光が当てられるべきである。それによってペスタロッチーの意義が、今日的な意味で問われることになるのである。

そのために広範な事業が計画されている。ペスタロッチーの主要関心事は、民衆の道徳的、精神的ならびに経済的「向上」にあった。このことは、哲学

的、宗教的、政治的かつ教育的なディメンションを含んでいる。ペスタロッチーの全体的な思索と活動は、人間の自然性、社会性ならびに道徳性を包括する全体的な人間像にもとづいているのである。こうしたペスタロッチーの全体性を、今日的な視点から解釈するためには、その全体性にふさわしい事業が必要である。そこでこの記念祭では、1996年1月14日の記念式典をはじめ、学術シンポジウム、展示、劇の上演ならびに記録映画の制作が計画されている。

一連の記念行事を通じて、ペスタロッチーをより広く深く人々に伝えていくことが、記念祭の第2の課題である。ペスタロッチーの関心事や理念を、今日どのように解釈し、現実の諸問題のなかで、どのようにして実現したらよいのかという課題について、幅広い議論がおこなわれることが望まれる。こうした議論を通して、ペスタロッチーの時代性を理解していくことが必要である。

以下、それぞれの行事について解説する。

2. ペスタロッチー生誕 250 年記念式典

1996年1月14日、チューリヒのシャウシュピールハウスで、ペスタロッチー生誕 250 年記念式典が挙行された。招待客約 800 名を迎えての盛大な式典であった。主だった招待者として、全州議会議員ヴレーミ・シュペーリ、国民議会議員クリストフ・ブロッヒャー、ヴレーミ・ミュラー＝エミー、参事官エルンスト・ブショール、州議会議長マークス・ケーギ、市議員ハンス・ヴェルリ、トーマス・ヴァグナーならびにカトリン・マルテリ、チューリヒ大学長ハンス＝ハインリヒ・シュミット、新ヘルヴェーチア協会会長ジャック・ブルンシュヴェイラー、全州議会議員、前ヘルヴェーチア協会会長ローズマリー・ジューメン、ならびにスイス教職員組合長ビート・ツェンプがあげられる。日本からも数名のペスタロッチー研究者が出席した。筆者もそのひとりである。

記念式典のはじめに、ゲマインデ、カントンならびに連邦の代表者 3 名が、お祝いのことばを述べた。まず、チューリヒ市長ヨーゼフ・エスターマンは、ペスタロッチーの意味における民主主義の原理について聴衆に訴えかけた。彼は、現代を民主主義に反する多くの事件がおこっている困難な時代としたうえで、こうした時代であっても私たちの社会は、リベラルかつヒューマンな世界

への期待を放棄することはできないと訴えた。この意味で、ペスタロッチーが今日なお価値ある存在であることを指し示した。彼は、ペスタロッチーは18世紀当時の「保守的な革命」が進行しつつある現実と直面しながらも、「民主主義的な理念」を保持し、とりわけすべての人々の機会平等と学校教育の要求をおこなったことをあげ、これは当時においても現代においても意義あることであると述べた。

政府代表者エルンスト・ホームベルガーは、「国民教育の父に対する感謝」を表すために、ペスタロッチーの有名なことば、「頭 Kopf、胸 Herz ならびに手 Hand」をとりあげた。ペスタロッチーの教育原理は、当時懸案となっていた学校改革に逆行するものではなかったとホームベルガーは明言し、ペスタロッチーへの賛辞のなかで、18世紀末のカントン・チューリヒでペスタロッチーが体験した、都市と農村の紛争のもつ意味の多義性を示した。

連邦文化庁長官代理ハンス・ルドルフ・デーリックは、ペスタロッチーのいうスイスにふさわしい理想ならびに連帯の理念を思い起こさせた。彼にとって、「もっとも有名なスイス人」は、公正な社会ならびに統一スイスの理念と同様、連帯を具現化するものにほかならない。それは今日のスイスにおいても、都市と農村、若者と老人、被雇用者と雇用者、失業者と労働者との間に実現させねばならないことである。またデーリックは、今日、それぞれの言語共同体の間の「協調問題」に直面しているスイスにとって、連帯は緊急に必要なものとなっていると述べた。これらの点から、ペスタロッチーのいう連帯の今日的意味を指摘した。

この式典の特徴のひとつは、ペスタロッチーだけでなく、彼の生涯のパートナーであるアンナ夫人にも、今日的な意味で解釈が加えられていたことである。ヴァウデヴィール劇団のふたりの俳優、リリアーナ・ハイムベルグとウルス・ビーラーによって、ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチーとアンナ・シュルテスの婚約時代の手紙にもとづいた劇の一部が、舞台上演された。屈託のない愛の誓いの奥には、ふたりの婚約者のけっして平坦ではない人生のあり方、とりわけ何度も繰り返された経済上の困難が暗示されていた。度重なる困難に際し、アンナ・シュルテスは、自立した近代的な女性として才能を現した。彼女はた

しかに「ペスタロッチーにふさわしき妻」だったが、もっぱら夫の陰に隠れていたのではなく、自分の意志と能力で夫のために全力を尽くしたのである。ここに、フェミニズムの視点からアンナ夫人を問い直す視点が示されているように思われる。

式典においてもっとも重要な寄与をしたのは、記念講演を行ったペーター・シュタッドラー（チューリヒ大学名誉教授）であった。彼は歴史家、伝記作家、ならびに名声の高いペスタロッチー研究者として、まるまる1時間、この有名なスイス人のありのままの姿を指し示した。シュタッドラーは、数百年間にわたるペスタロッチーの偶像化への批判から始めた。ペスタロッチー像は、シンボリックな像として存在し続けていたが、このことは彼の業績を正当に評価する際、マイナスの効果をもたらしていた。単にペスタロッチーを偶像化してあがめるのではなく、ペスタロッチーの理論の何を現在に残し、何を捨て去るのか、このことがまず研究されねばならないのである。

「ペスタロッチーにおける政治と教育」というテーマで、シュタッドラーはまず、ペスタロッチーの時代の政治的経済的な前提条件、すなわちアンシャン・レジーム、啓蒙主義、フランス革命、工業化、銀行システムについて簡単に述べた。その際、以下のことが明らかにされた。つまり、この遅まきの教育学者は、青年時代に歴史的事件に積極的に関与したが、同時に多くの失敗を甘受しなければならなかった——学生として、政治的文筆家として、農場経営者として——ということが。生涯の終わりにいたるまで、ペスタロッチーは現実感覚の欠乏と過大な自己評価とのギャップに苦しんだ。しかし彼は、失敗を成功に転換する力をもっていた。

機会をとらえて書かれた教育に関する多くの著作にもとづいて、ペスタロッチーの名声は国内外に広まった。決定的な契機——同時に最高点であるが——を、ペスタロッチーは53歳のとき、シュタンス孤児院の指導を引き受けることによって体験した。孤児院で彼は、教育上の実験的な試みを行い、学校の本当の喜びを知り、そしてとりわけ民主主義の出発点としての民衆教育の原則を充分に発展させることができた。もっともシュタッドラーは次の2点を付け加えている。第1に、ペスタロッチーは貧民教育の理想を実際には実現することは

できなかったという点、第2に、女子教育をなおざりにしたという点である。

シュタッドラーによれば、ペスタロッチーの寄与は、19世紀の教育学にひとつの決定的な方向性を指し示した点にある。教育者であり「陽気な楽道家」であるペスタロッチーにとって、エリートの養成ではなく、民衆教育が重要だった。そのゆえに彼は「世界の教育を基礎づけた人間」となった。彼は、政治的かつ個人的な生活状況のすべてにおいて、積極的に思索した人間であった。私たちは、今日ペスタロッチーを単なる神話へと落ちぶれさせたり、彼の業績を見損なったりすることはできないだろう。ペスタロッチーの業績の意義は、私たちすべてのなかに生き続けているのである。

講演の最後でシュタッドラーは聴衆に対し、「ペスタロッチーは神話ではない。そうではなくて現実である。彼はわたしたちのなかに、ひとりの例外もなく、生き続けているのである」と力強く語り、この式典の目的を端的に示した。

3. 学術シンポジウム — ペスタロッチーは歴史的有効性をもちうるか —

1996年1月15日から17日まで、チューリヒ大学において国際シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、ベルン大学とチューリヒ大学との共同によって組織された。組織委員会は次のような構成である。H. H. シュミット（チューリヒ大学長）、Ch. ショイブリン（ベルン大学長）、F. -P. ハーガー（チューリヒ大学正教授）、J. エルカース（ベルン大学正教授）、P. シュタッドラー（チューリヒ大学名誉教授）、F. オスターヴァルダー（ベルン大学）ならびにD. トレーラー（チューリヒ大学主任助手 / ペスタロッチー アーナム研究協力者）。

シンポジウムの基本的な目的は、ペスタロッチーの業績を学術的かつ哲学的に十分に議論することにある。そのために、このシンポジウムでは、研究報告者の数が制限されるとともに、発表テーマが事実史ならびに精神史の文脈に意識的におかれている。こうすることによって、それまでペスタロッチー受容において陥りがちであった、偶像化と観念化の危険性を防ごうとしているのである。

シンポジウムには、日本ペスタロッチー・フレーベル学会の宮崎俊明会員と

伊藤敏子会員が参加され、研究発表された。両会員の発表テーマは、Pestalozzis Probleminteresse in seinen “Bemerkungen zu gelesenen Büchern” (1785-1795) (宮崎会員)、Zum Wandel der Auffassung der Pestalozzischen “Anschauung auf dem Weg vom Westen in den Osten” (伊藤会員) であった。また、両会員はペスタロッチーに関する著作をドイツ語で出版している。あわせてここで紹介したい。

Toshiaki MIYAZAKI: *Pestalozzi und seine Lektüre – Entfaltung des Bewußtseins über Bildung, Schule und Gesellschaft –*, in: *Braunschweiger Arbeiten zur Schulpädagogik*, Band 8, Hrsg. von Dieter Hoof, Braunschweig, 1992.

Toshiko ITOH: *Die Kategorie der Anschauung in der Pädagogik Pestalozzis – Theorie und Rezeption im Japan des 19. Jahrhunderts*, Bern, 1995.

分科会のテーマと発表者名を、プログラムにしたがって以下に掲載する。

[Soziale und politische Ideen und Veränderungen]

- ① Ulrich Herrmann: Pestalozzis pädagogisches Denken als Reflex politisch-sozialer Modernisierungsprozesse.
- ② Horst Dräger: Pestalozzi: Der Vergessene Erwachsenenbilder und seine andragogische Wirkungsgeschichte.
- ③ Dieter Hof: Pestalozzis Entwurf sexualpädagogischer Sozialarbeit und Familienhilfe – Historische Verfrühung oder Utopie?.
- ④ Daniel Winter: Pestalozzi im nationalen Diskurs der Schweiz.
- ⑤ Heinz Slübig: Pestalozzis Einfluss auf die preussische Reformpolitik.
- ⑥ Hanns Peter Holl: Gotthelf und Pestalozzi.
- ⑦ Renate Hinz: “Der Anfang und das Ende meiner Politik ist Erziehung”. Die preussische Pestalozzi – Rezeption im Spiegel von Pädagogik und Politik(1806-1813).

[Anthropologie, Philosophie, Geistesgeschichte]

- ① Fritz-Peter Hager: Pestalozzi und die platonisch-christlicher Denktradi-

tion.

- ② Daniel Tröhler: Der Paradigmenwechsel in Pestalozzis Sozialphilosophie im Vor- und Umfeld der Französischen Revolution.
- ③ Leonhard Friedrich: Pestalozzis Menschenbild und sein Erziehungsverständnis.
- ④ Michel Soëtard: Das "Prinzip Realität" bei Pestalozzi.
- ⑤ Toshiaki Miyazaki: Pestalozzis Probleminteresse in seinen "Bemerkungen zu gelesenen Büchern" (1785-1795/7).
- ⑥ Volker Kraft: Biographie und pädagogische Theorie – Psychoanalytische Einblicke in Kopf, Herz und Hand Pestalozzis.
- ⑦ Pelra Korle: Die Rousseau-Rezeption des jungen Pestalozzi.
- ⑧ Giosua Thöny: Zur Wirkung Pestalozzis in Nohls Theorie des pädagogischen Verhältnisses.

[Methode und Schule]

- ① Jürgen Oelkers: Methode und Schule: Konzepte und Kritiken Pestalozzis in heutiger Sicht.
- ② Heinz-Elmar Tenorth: Die Rolle Pestalozzis in der Preussischen Lehrerbewegung bis 1927.
- ③ Otto Wullschleger: Auf den Spuren der Dissozialität. (Pestalozzis Hinweis auf die Grundstörung).
- ④ Gerhard Kuhlmann: Fachhochschule für Bibliothekswesen Stuttgart Einführung in die Pädagogik. Anknüpfungen an Pestalozzi.
- ⑤ Toshiko Itoh: Zum Wandel der Auffassung der Pestalozzischen "Anschauung auf dem Weg vom Westen in den Osten".
- ⑥ Heidemarie Kühn: "Sie wollen ihn feiern, doch sie kennen ihn nicht!" – Die Belriner Lehrerschaft und Pestalozzi in der Mitte 19. Jahrhunderts.
- ⑦ Werner Keil: "Wie Johann Heinrich seine Kinder lehrt..." lebengeschichte und Erziehung des Hans Jacob Pestalozzi. – Pestalozzis Sohn

zwischen Erziehungsanspruch und Erziehungswirklichkeit.

- ⑧ Sylvia Springer: Pestalozzis Jesus-Bild und seine Bedeutung für die sittliche (Selbst-)Erziehung.
- ⑨ Peter Metz: “Über die wahre Nachfolge Pestalozzis” – oder: Sebastian Zuberbühler (1809-1868): rezeptionsgeschichtes Fallbeispiel.

[Theologische und religiöse Themen]

- ① Rudolf Dellsperger: Pestalozzi und Pietismus.
- ② Fritz Osterwalder: Pestalozzianismus in der Auseinandersetzung über die Laizität der Pädagogik und der Schule.

[Rahmenreferate]

- ① Sergio Moravia: Die anthropologischen Grundlagen der Erziehung im 18. Jahrhundert(französisch).
- ② Martin Brecht: Westfälische Wilhelms-Universität Münster Stand und Themen der theologischen Diskussion um 1800.
- ③ Ulrich im Hof: Stand und Themen der sozialen, rechtlichen und politischen Auseinandersetzung um 1800.

以上が学術シンポジウムの概要である。なお、本シンポジウムの発表内容については、近くペスタロッチャーアヌムから公刊される予定である。

4. 展示 〈ペスタロッター 一人間像, 探究, 夢 〉

展示は、1996年1月14日チューリヒのシュトラウホーフ美術館を皮切りに、スイス全土で公開されることになっている。その主な日程は、次の通りである。

日 程	開催地	開催場所
1996年1月14日～ 3月31日	Zürich	Strauhof
4月17日～ 5月15日	Liestal	Lehrerseminar
5月22日～ 6月23日	Lenzburg	Stapferhaus in Schloss
6月29日～ 8月25日	Burgdorf	Kornhaus und Schlossmuseum
9月 8日～10月20日	Yverdon- les-Bains	Hôtel de ville

今回のペスタロッターに関する展示の目的は、ペスタロッターの生涯や業績を紹介することではなく、むしろどのようにしてペスタロッターは偶像化されてきたのか、検証することにある。偶像化されたペスタロッター像の由来と歴史について、次のような問いが発せられる。一般に見られるペスタロッター像はどのようにして発生したのだろうか。彼の肖像画はどのようなものだろうか。どのような社会的諸力が神話像の形成を促進するのだろうか。ペスタロッター像の形成過程にペスタロッター自身はどのように貢献したのだろうか。これほどの知名度が、どのようにして育まれつづけたのだろうか。

この展示では、ペスタロッターにおける主要な3つの概念を中心にして、偶像化されたペスタロッター像を示すとともに、歴史との関連でペスタロッター思想を捉えることにより、ペスタロッターの真実の姿を明確にする試みがなされている。主要な3つの概念とは、彼の子ども観ならびに教育観を貫く概念、すなわち、「母親 Mutter」、「メトデー Methode」、「貧困 Armut」である。これらは相互に緊密に結合しているだけでなく、ペスタロッター像を構成する重要な要素でもある。ペスタロッターの「経済的かつ倫理的に自立した民衆という夢 Traum」を中心にしながら、「母親」、「メトデー」ならびに「貧困」に

ついて、現代的ならびに伝記的コンテクストからの解釈が示され、展示されている。

展示会場には、日本におけるペスタロッチー受容に関するコーナーがあり、日本で出版されたペスタロッチーに関する著書や翻訳書が展示されている。また、1995年8月にオープンした鏡野町（岡山県）のペスタロッチ・タウンについての記事も展示され、紹介されている。

5. 教員養成とペスタロッチー

『リーन्हルトとゲルトルート』における中心的な教育者像が、ゲルトルートからグリューフィに変わったことは、歴史的発展のもとで必然的ともいえるが、このことは教師像、教師の課題ならびに義務についての問いとともに、こうした職業がどこまで可能であるかという問いを提出しているといえる。

「教師教育の場ならびに学校に関して、社会的かつ哲学的に真剣に取り組んだこの文筆家、民衆の教育者の回想を、どのようにしたらいっそう刺激的かつ意義深くとりあげ、深めることができるだろうか」、という課題意識にもとづいて、様々な催しが企画されている。

スイス教職員組合（Der Dachverband Schweizer Lehrerinnen und Lehrer [LCH]）の主催による行事として、1996年6月に「ペスタロッチーの日」が予定されている。また1996年8月には、スイス教職員組合による第1回ペスタロッチー賞が授与される予定である。

その他の行事は次のとおりである。

・スイスの教職員養成制度について（1996年7月8日－12日、15日－19日、シュヴィーツ）

主な内容

- ① “Schule halten im Geiste Pestalozzis”, Arthur Brühlmeier
(1996年7月11日)
- ② “Mit Kindern Schule machen”, Edwin Achermann
- ③ “Pestalozzi ist ein Kambodschaner, Palästinenser, Aethiopier, Appenzeller, Thurgauer, Basler... eine Frau?”, Team Kinderdorf

Pestalozzi in Trogen

- ④ “Pestalozzi und die Volksschule heute”, Hans Weber
- ⑤ “Pestalozzi und die Schule heute, Zug (1996年9月4,11日)

• ブルックとレンツブルクにおける催し

主な内容

- ① Zyklus Johann Heinrich Pestalozzi -Lebenswerk/ Lehre vom Menschen/ Erziehungsidee, Arthur Brühlmeier, Brugg (1996年3月6, 13, 20日), Lenzburg (1996年6月5, 12, 19日)
- ② “Lenzburger Rede” von Prof. Peter von Matt, Lenzburg (1996年6月13日)
- ③ Pestalozzis Lenzburger Rede, Arthur Brühlmeier, Lenzburg (1996年11月6, 13, 20日)

• トローゲンのペスタロッター子ども村における催し

主な内容

- ① Jubiläumsfeier 50 Jahre Kinderdorf Pestalozzi Trogen (1996年4月27日)
- ② Pestalozzi und ein Dorf, das seinen Namen trägt, in Rahmen 50 Jahre Kinderdorf Pestalozzi Trogen, Lenzburg (1996年6月11日)

• ビル村ノイホーフのスイス・ペスタロッターハイムにおける催し

主な内容

- ① Schlussveranstaltung zur Fertigstellung der Kritische Ausgabe 《Sämtliche Werke und Briefe Johann Heinrich Pestalozzis》 (1996年11月7日)

6. 「アンナとハインリヒ」という題の朗読劇の上演

これは、基本的には J. H. ペスタロッターとアンナ・シュルテスとの往復書簡にもとづいて制作されている。企画は教育学者ダグマー・シッフエルリ、原

作は”Anna Pestalozzi-Schulthess—ihr Leben mit Heinrich Pestalozzi—
(Zürich, 1996)”である。朗読劇は、ペスタロッチーの書簡、日記の書き込みなら
びに著作を組み合わせて、アンナ・シュルテスとJ. H. ペスタロッチーとの会話
を、現代によみがえらせようとするものである。朗読劇では、フランシスカ・ロ
マーナ・フォン・ハルヴィールが共通の友人としてとりあげられるとともに、
彼女との関係を通して時代との関連がとりいれられているが、このことは予想
外に劇を現実的なものにしてている。朗読劇ではまた、ひとり息子、ハンス・ヤコ
ブの生涯がとりあげられている。朗読劇のひとつまは、すでに1月14日にチュ
ーリヒのシャウシュピールハウスでの記念式典で上映された。

朗読劇の初演は、2月5日（チューリヒ・プッペン劇場）であり、その後2
月28日（ゲーベンストルフ）、3月2／3日（ストゥディオ・オルテン劇場）、
3月10日（ビルスフェルテン）で上演される予定である。その後の客演も予定
されている。

7. 記録映画 <ペスタロッチーの名において>

この記録映画の意図は、ペスタロッチーを今日の視聴者にいちだんと深く理
解させることにある。この映画では、スイスならびに世界中において見られる、
まさにペスタロッチーの名において示されるものは何かということが追求される。

この映画の制作のため、精力的な取材がおこなわれている。制作責任者は、
トビアス・ヴィース、プロデューサーはペーター・シュペーリである。1995年
8月末から約2週間日本に滞在し、日本ペスタロッチー・フレーベル学会第13
回大会にも参加されたことは、記憶に新しいところである。その他スイス国外
では、ブラジルのサン・パウロ近辺、南イングランドのペスタロッチー・子ども
村等、国内では、ビルフェルトのノイホーフ、イヴェルドンにおけるペスタロ
ッチー誕生祭等での取材と撮影が予定されている。

この記録映画は、それぞれのペスタロッチー像を人々の心にいきいきと思い
浮かべさせるだろう。ペスタロッチーを知らないか、名前だけを知っていると
いう人の場合には、ペスタロッチーと関係をもつ多様なことがらを示すことで、
彼についての具体的なイメージをもたせるよう導くだろう。

「ペスタロッチーの名において」は、1996年6月完成予定である。視聴者のために、学校の授業時間での上映のほか、映画での上映、スイス国内ならびに国外でのテレビ中継による放映が予定されている。

8. 記念出版

ペスタロッチー生誕 250年祭を記念して、以下の出版が予定されている。

(1) PUBLIKATIONEN

Pestalozzianum [Hrsg.]

Zur Vervollständigung der Gesamtausgabe der Werke und Briefe

J. H. Pestalozzis erscheinen 1995/96:

- Band 17B: Werke
- Ergänzungsband 14: Briefe
- Ergänzungsband 29: Werke
- Registerband 1 [bereits erschienen]

Buchverlag Neue Zürcher Zeitung

[Gesamtprospekt beim Verlag erhältlich; Bezug über den
Buchhandel]

Autorenteam

《Auf den Spuren Pestalozzis. Reise zu Orten seines Lebens:
Zürich, Birr, Stans, Burgdorf, Yverdon》

ca. 160 Seiten, illustriert,

Pestalozzianum Verlag Zürich/Werd Verlag Zürich

[erscheint Ende 1995]

En version française:

《Sur les pas de Pestalozzi.

Histoire et lieux de vie: Zurich, Birr, Stans, Berthoud, Yverdon》

Env. 160 pages, illustré

Edition du Pestalozzianum Zurich/ Edition du Centre de

documentation et de recherche Pestalozzi, Yverdon-les-Bains

{ Parution début 1996 }

Hans Gehrig { Hrsg. }

《Pestalozzi in China》

Vollständige Dokumentation der Referate, die am Symposium vom
10-14. Oktober 1994 in Beijing gehalten wurden.

In englischer Sprache, 176 Seiten

Pestalozzianum Verlag Zürich

{ bereits lieferbar }

Daniel Tröhler

《Pestalozzi oder Ein Lehrstück über die Unmöglichkeit,
Lehren zu lehren》

Abdruck des integralen Dramentextes mit Einführung und
zusätzlichem Informationsmaterial.

ca. 80 Seiten, illustriert

Pestalozzianum Verlag Zürich

{ erscheint im Frühjahr 1996 }

Ivo Nezel

《Pestalozzi - Comenius》

ca. 128 Seiten.

Eine Gemeinschaftproduktion

Pestalozzianum Verlag Zürich / Comenius Verlag Hitzkirch

{ erscheint 1996 }

Toshiko Itoh

《Pestalozzi in Japan》

ca. 80 Seiten.

Pestalozzianum Verlag Zürich

{ erscheint 1996 }

Ursula Germann

《Pestalozzis Mutterbild》

ca. 100 Seiten

Pestalozzianum Verlag Zürich

[erscheint 1996]

(2) PERIODIKA - SONDERNUMMERN

《Neue Pestalozzi-Blätter》 [Redaktion: Daniel Tröhler et. al.]

Halbjährlich erscheinendes Periodikum mit Beiträgen
aus der Pestalozzi-Forschung

Pestalozzianum Verlag Zürich

[Nr. 1/95 erschienen; Nr. 2/96 erscheint im Januar 1996]

《Bildungsforschung und Bildungspraxis》 [Redaktion: Max Furrer]

Sondernummer, 95: "Pestalozzi"

Deutsche und französische Beiträge div. Autoren

Universitätsverlag Freiburg Schweiz

[erscheint Ende 1995]

《Schweizer Schule》 [Redaktion: Heinz Moser]

Sondernummer "Pestalozzi"

[erscheint 1996]

《Beiträge zur Lehrerbildung [BZL] 》

[Redaktion: Kurt Reusser / Fritz Osterwalder]

Sondernummer 《Pestalozzi - Unterricht und Lehrerbildung》

[Arbeitstitel]

[erscheint in der zweiten Hälfte 1996]

(3) MATERIALIENKOFFER FUER DEN UNTERRICHT

[MITTELSTUFE]

Lucia Amberg / Claudia Cattaneo

《Von Kind und Kegel. So lebten, lernten und spielten Kinder
vor 200 Jahren.》

Ein Materialienkoffer

Weitere Auskünfte über Verkauf und Verleih des Koffers
beim Pestalozzianum, Fachstelle Schule & Museum,
Stampfenbachstrasse 121, 8035 Zürich, Tel. 01/368 26 28.
[in Vorbereitung: erscheint im 2. Quartal 1996]

(4) TONBILDSCHAU

Phil Dänzer

«J.H. Pestalozzi. Seinen Kampf für soziale Gerechtigkeit
und Menschenbildung»

Überarbeitete Neufassung,
lieferbar in deutscher, französischer,
englischer und chinesischer Sprache.

Videokassette, 32 min.

Pestalozzianum Verlag Zürich

[bereits lieferbar]

(5) CD-ROM

Leonhard Friedrich/Sylvia Springer

«Johann Heinrich Pestalozzis Gesamtwerk. Kritische Ausgabe
auf CD-ROM»

[Hrsg.: Pestalozzianum Zürich]

[bereits lieferbar, separater Prospekt vorhanden]

Auskünfte und Bestellungen:

Pestalozzianum Verlag

Beckenhofstrasse 35

8035 Zürich,

Tel.: 01 / 368 45 45, Fax: 01 / 368 45 96

お わ り に

以上、ペスタロッチー生誕250年を記念してスイスで予定されているさまざまな行事について報告してきた。行事の多様さもさることながら、シンポジウムのテーマひとつをとってみても、ペスタロッチーが残した足跡の大きさに今更ながら驚嘆する。これらひとつひとつが、近代以降の教育学の指導原理となっていることは、疑いのない事実である。

けれども、記念祭の基本テーマに示されるように、ただペスタロッチーを崇拜の対象としてあがめるだけでは、記念祭の目的が達成されたとはいえない。むしろペスタロッチーを、彼が生きた時代のなかで吟味し、彼が求めたもの、なし遂げたもの、またなし遂げられなかったものを明確にしていく作業が必要なのではないだろうか。長い年月をかけて編纂された批判版全集と批判版書簡集が今年度完成すること、さらに CD-ROM での検索が可能になることで、ペスタロッチー研究がまた一歩進むだろう。また1995年より、“Neue Pestalozzi-Blätter” が再び発刊され、研究交流に寄与している。こうした基礎的な研究の進展を通して、崇拜の対象ではなく、研究の対象としてのペスタロッチー研究が発展することを期待したい。

またこの記念祭は、ペスタロッチー研究の発展に寄与するだけではない。フランス革命、スイス革命に示される政治的変動、さらに近代資本主義による農村の疲弊に代表される経済構造の変動の時代にあって、ペスタロッチーの同時代人が抱いた絶望感は、世紀末を迎えた私たちがもつ絶望感、虚無感と機軸をひとつにする。私たちはこの時代を超えられるのだろうか、超えられるとしたら何が必要なのだろうか。ペスタロッチーは答えるだろう。「それをしようという不退転の決意と、それができるといふ、どんな経験によっても揺り動かされない信念と、それをなすべしという名状しがたい内なる生きた感情」とが、現状にとどまらずさらなる前進をなす力を、私たちに与えてくれると。記念祭はまた、ペスタロッチーは単なる偶像でも神話でもなく、現実生きた人間であることを私たちに指し示すことによって、困難な時代である今を生きる私たちに、未来をみつめる力をも与えてくれるのである。

〔注〕

ペスタロッチー生誕 250年祭についての問い合わせ先は、次のとおりである。

- OK Pestalozzi Gedenkjahr 1996
Prof. Dr. Hans Gehrig
Präsident
c/o Pestalozzianum Zürich
Beckenhofstr. 35. Postfach
8035 Zürich
Tel.: 01/368 45 43, Fax: 01/368 45 97
- Pestalozzianum Zürich/Universität Zürich
Pestalozzi-Forschungsstelle
Dr. Daniel Tröhler
Vizepräsident OK
Stampfenbachstrasse 121, Postfach
8035 Zürich
Tel.: 01/368 26 23, Fax: 01/368 26 12
- Sekretariat des OK
Pestalozzianum Zürich
Frau Ursula Findeisen
Direktionssekretariat
Beckenhofstrasse 35, Postfach
8035 Zürich
Tel.; 01/368 45 43, Fax:01/368 45 97

〔参考資料〕

- Pestalozzi Gedenkjahr 1996 Programm, Pestalozzianum Zürich.
- Neue Züricher Zeitung, Montag, 15. Januar 1996.
- Tages-Anzeiger, Montag, 15. Januar 1996.